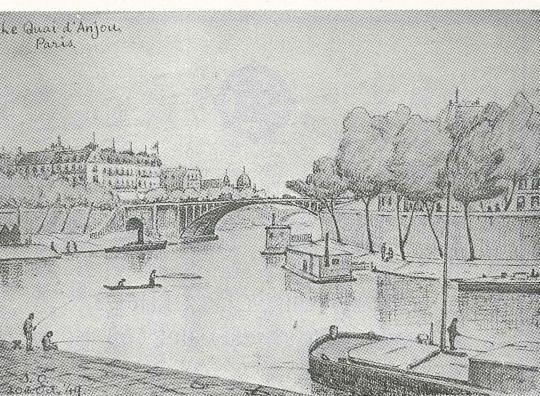


松方コレクション

美術品の海外流出・焼失を惜しんでの松方幸次郎さんが、買いまくった作品万点を越す、設計まで成った「共楽美術館」は夢に終つたが、「国立美術館」として美事に開花した。松方幸次郎さんは、明治の元勲松方正義公の三男坊。川崎正蔵さんに迎えられて川崎造船所の初代社長となつた。それまでの川崎造船所は川崎の個人企業であつた。



小川実三郎氏スケッチ／バリ風景

神戸では松方の一頭立ての馬車は有名だ。

たりする等の気軽さの持主であつた  
若冠三十才で迎えられた彼の才  
腕がもつともよく發揮されたのは  
「ストックボーリー」の建造であろう

世界大戦がはじまるといふと、やがておこるであろう船不足を見越して、標準型船の大量生産をはじめた。船の既成船型が、主に二種類進んで伸び

戸港にストックして買手を待つた。大正七年に完成した来福丸（五、八五七総屯）などは、工期わずか三十日という記録を持つている。しかし肝心の鉄鋼について、イギリスは大正五年に、アメリカは六年に、日本に対する鋼材の輸出を禁止した。日本造船界にとって死活問題であった政府の外交交渉でどうしても解決しないとみると松方さんは金子さんと組んで民間経済外交に奔走した。而して大正七年四月遂に日米船銘交換し、相手に商売した松方さんは大戦中の

ヨンの一部がフランスに残留する」とになり、第二次世界戦争に遭遇、ロンドンに残つたものは火災にありパリに残つたものは敵産として没収

尚、このコレクションに当つては  
高畠会長のロンドン時代並々ならぬ  
合氣道礼

合氣道札贊

久琢磨

本政府があらゆる手段を講じて交渉した結果、昭和三十四年、フランス政府は「長く貸与する」というかたちで日本に寄贈したのであつた。この時神戸は地元の故をもつて神戸に置くことを希望した、話の順序からも実現はみなかつた。

ユの設計によつてもつとも近代的な  
国立美術館をつくつた。その総数三  
百八十一點、絵画三百八点、彫刻六  
十三点、書籍五冊。国立西洋美術館  
の基礎をつくつたのは松方コレクシ  
ヨンであつた。

浮世絵のコレクションは、早く日本に送られて、一時川崎造船所の倉庫に保管されていたが、現在は国立博物館に保管されて、人びとの目に触れることが少いのはさびしいことである。川崎造船所にあつた時の点数は、七千九百九十六枚といわれて

る。合氣道万歳だ。正直なところ單に精神修養、健康増進のための体育運動としては、合氣道が一番いい。最適の運動として推奨する。

合氣道は戦後急速に普及発展し、世間の脚光をあび注目の焦点となつたが、その源流は何であり、眞の創始者は誰であるかについてまず私の見解を述べておこう。一般的には自他ともに認められているとおり、植芝盛平先生となつてゐるが、實際はこの恩師武田惣角先生ではなかろうか。そこで暫く彼等の足跡を洗つてみよう。

植芝盛平という人は和歌山県田辺市の出身で、適齢で帝国海軍に入り、兵曹まで進んだ。相撲が強くて有名であつたといわれている。退役後屯

ら警備にも当つていいた武田惣角先生に出会い、一触の後、直ちに入門、大東流合気柔術の伝授をうけた。その技の強烈さに感激し、内弟子として住みこみ、ついに屯田農業も放擲してこの武道に打ちこんだ。武田先生が道内の武者指導に巡回すると、彼は必ず受身役の弟子としてついて回つた。かくして数年、頭の回転の早い彼は、大東流合気柔術の秘術を覚えた。これは北海の果てに放置すべく余りにも貴重な武道だと覚った彼は、恩師武田先生の引きとめる手を振り切つて花の東京に乗り出した。昭和四、五年のことである。

牛込若松町に道場を構えて、ボツボツ普及に乗り出し、陸海軍の将軍たちに同好者を求め、警視庁方面へも

技の激しいのに打ち敗けて、その実体を究めることができず、自然講道館幹部にも正確に報告できず正当な認識を得ることも出来ないまま終つたらしいことは返す返すも遺憾千万である。

私たちが朝日の上司たる石井先輩の推薦というよりも強請して、植芝先生一行を大阪に迎え、入門してその猛烈な逆技を習つたのも此頃であった。今にして尚不思議に思うのは、技術そのものは純然たる大東流合気柔術であつたにかかわらず、植芝先生始め随行の誰もが口を塞して語らず始めた。だから、昭和十年春、当の武田惣角先生が突如として大阪朝日新聞の玄

(13)

大半をロンドンのしかも鈴木商店の  
高畠さんのオフィスで暮したと言つ  
てもよいくらいである。ヨーロッパ  
の戦況をつかみ、鉄を買い込み、ス  
トックポートを売り込む為であつた。  
松方コレクションの収集はそうした  
中になされた。どうして松方さんが、  
絵の収集に当るようになつたのか、  
高畠さんが「異郷でその無聊をまぎ  
らす為に一、二枚の油絵を求めたこ  
とから、松方さんは絵に病つきとな  
つた。しだいに目が冴えてき、のち  
には随分と傑作を重点に集められた」  
と云つてゐる。人に依つては「ドイ  
ツが開発した潜水艦の図面をねらつ  
てロンドンやパリにあつた美術品に  
大金を出したのは、その煙幕を張る  
ためだつた」と云う。果たして當つ  
ているかどうか判らないが、川崎造  
船所が潜水艦の開發に於いて他に先  
していたのは事実だつた。とにかく  
松方さんの絵の買ひ方は豪放だつた。  
「この店の絵を全部買つた」と云う  
やり方さへあつた。そうした中でも、  
松方さんが世界最高と云うことので  
きるベルの浮世絵のコレクション  
の入手に成功したというニュースは、  
世界各国の美術収集家を驚嘆させた。  
日本の浮世絵の価値をいち早く見つ  
けたのはフランス人であつた。や  
がて、アメリカ人が浮世絵に注目  
するようになり、財力にものをい  
わせて日本に乗り込んでみると、  
いいものは殆どフランスに流出し  
ていることを知つた。その触手が  
フランスに及んで来ると、浮世絵  
を愛好するフランス人の画家たち  
は、これを守るために宝石商のベ  
ベルに「フランスにある浮世絵を  
買いあつめてほしい」と頼んだの  
であつた。ベルの収集がいかに  
偉大だつたかは、作画期間が短か  
かった為に得がたいものになつて  
いる写楽の研究はベルのコレク  
ションなしには出来なかつたとい  
うことでも知られよう。ベルは  
自分の生涯をかけて集めた浮世絵  
に非常な愛着をもつたけれど、ド  
イツ軍の空・陸の攻撃は激しく、  
浮世絵の保管が次第に困難になつ  
てきたのであつた。「浮世絵が生  
まれ故郷に帰るのであれば……」  
と松方さんに手放すことになつた。  
戦争の終つた大正九年頃から、次  
第に日本に送られはじめたが、輸  
入美術品に高率の関税がかけられ  
しまう。この為、松方コレクシ

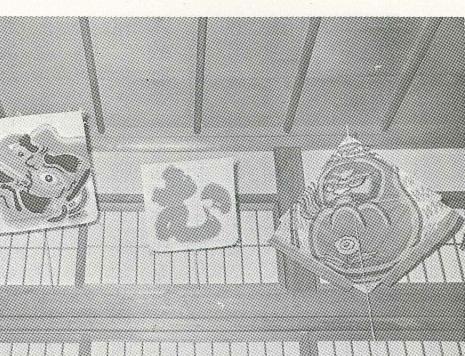
(13)  $\frac{d}{dt} \left( \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \dot{x}_i} \right) - \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial x_i} = 0$  (12)

関に現われ、「植芝盛平に合氣柔術

を習つてゐるというが、あれにはまだ充分教えてない、中途半端だ、眞に合氣柔術を学ばんとするなら、この我に従え、我こそは北海道網走に住む大東流合氣柔術の宗家武田惣角源正義なるぞ」と腰の大刀に右手をかけ、左手に六尺有余の鉄棒をジャンジャンとつき鳴らした時は、流石の守衛長も平身低頭して迎え入れたという。その時私はまだ充分に信用が出来ず、庶務部長で当の責任者であるということは極秘にして、丸坊

で極秘にしていた大東流合氣柔術の鬼、武田先生に恐れをなしたか、忽ち門人を引具して東京へ引揚げてしまつた。お札や、お別れの挨拶をすつた。この頃の植芝先生一行の逆技も大変強くて、我々門人は毎日手首に黒い内出血のアザが絶えなかつた。

東京へ引揚げてから植芝先生の消息は明らかでなかつたが、名前も判り合氣道とし、キツイ逆技を少な



△ 忘れられていた絵だこも最近はブームになっている

くして合氣投げのハデな技を多くしたらしい。そのためか戦後メキメキと売出し、各地の大学、大会社は勿論、自民党の幹部あたりにも心酔者が殖えて、若松町の道場も新築、諸外国にまで進出、発展、誠に芽出度い限りである。私は別に脱退したのでもなく、破門されたのでもない。これは戦後、二十八年ごろ、最高八段の免許証をいただいたことによつても明らかである。

私ははじめに明らかに申したごとく、世界平和の今日単に健康増進、精神修養のためなら植芝先生創始の合氣道で充分であると信じ、私の主

宰している関西合氣道クラブ道場でも太半の時間は合氣道にあてていて、ただこの際特に望みたいのは、この合氣道なる術は武田先生の伝え残したもので忌避され、稍もすれば、すながちであるから、私の道場では少な

くとも三分の一の時間は、この逆技の練習にあて、痛い痛いと叫びながら鍛錬している。嬉しいことには鍛練をすればするほど、その痛さがなくなり、ついにはいさかも痛みを感じなくなる。そこで最後に、合氣道札賛を繰りかえしたいが、真底は大東流合氣武道万歳と叫びたい。

(大東流合氣武道免許皆伝)

## 東大寺戒壇院四天王の邪鬼

柳 田 義 一

邪鬼。踏鬼。天邪鬼。

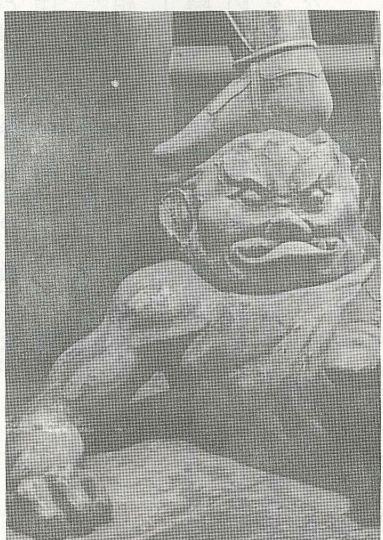
それは疎外されている無用者だ。陽のささぬ堂の片隅の、埃にまみれた日陰者、醜い不潔な嫌らしい、浮かぶ瀬もなく這いつぶた、珍妙無類の毛の無い怪獣みたいなものである。円満具足の如来像や、優しく美しい菩薩像、雄魁な天部像に満ちあふれた、壯麗極まりもない淨土表現の舞台において、邪鬼の姿はあまりにも惨めだ。

信仰篤かつた時代に生きた人たち

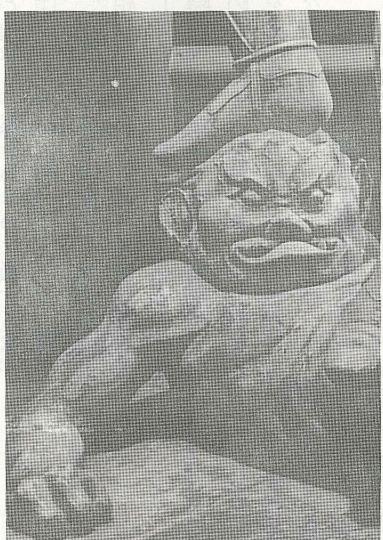
は、仏を礼拝して低く垂れた頭の眼前に、この醜惡な肉塊を見出しては、仏国土にふさわしからぬ異端者と眉

にひそめたかもしだれぬ。或は、因果応報を眼前に見る心地で、或は邪鬼の戒めの端的な例証として、または仏法を守る強力な護法神の力の証明として、この憐れむべき態たらくを肯うたことであろう。誰にも愛されず、誰にも認められず、威丈高な四天王の重圧の下に、踏みつけられ押し潰され、蹴飛ばされこき使われ、嘲けられ罵られ辱かしめられ、歯牙にもかけられず見捨てられ、指さしの笑いの的にされる、邪鬼とはまさに悲しい宿命の生きものであつた。だが今日私たちは、この疎外された無用者に、何故か心を惹かれる。

日陰者に光を当てようとする。浄土の異端者に親しささえ覚えるのである。盛んな古美術愛好熱や、醜悪さにも美を見出す現代の感受性によるものか、それとも、虐げられた存在に対する同情や、押しひしがれながらもしぶとく生き、運命に耐え続ける逞しい邪鬼の造形の面白さには、その表現の種々相に、意外に大きな人間精神の実相が反映しているよう、私に思える。仏像の造型には現わすことのできなかつた、赤裸な人間性の表現が、邪鬼には託されていそうである。私は常日頃この事に興味を感じている。



東大寺戒壇院の四天王像とその踏鬼は、塑造に依る最高の作品と称せられる名作である。これらの像が作られたのは、總国分寺東大寺の前身である大和國分寺の建立されたころ、すなわち天平十四年から十八年頃、七四二年から七四六年ころと推定される。天平の造型力が最高潮に向かつて上昇して行きつつある。



にきびしく眉根を寄せて、一点を凝視する。

広目天は左手に巻紙を持ち右手に筆をとり理智的な表情を沈ませて静かに佇んでいる。

持国天王は剣を前に横たえて刮目して睥睨し、增長天は鋒を立てて片手を腰に、かつと口を開いて叱咤する。

これらの表情のみごとさは、その情感の深さにおいて他の追隨を許さぬ。天王の追隨を許さぬ。天王としての忿怒をあらわすに露呈せず、怒りに悲しみの翳を漂わせて、天平の不安を凝視するような面持がこよなく尊く感じさせる。

身にまとう革甲の堅さと衣帛の柔らかさ、顔の筋肉などの微妙な感触は、塑造という自在な技法の完全な駆使によつて、高度な完成を見ゆる。そしてその踏鬼の何と云う完璧な写実性であろう。邪鬼とせ、天平盛期の造形感覚をさまざまと偲ばせる。そしてその踏鬼の何と云う空想的な生きものの、造型に、写実性とはふさわしからぬ表現ではあるが、まさしく写実としか形容の出来ぬ確実さである。この邪鬼たちは

まさにその黄金時代の作だ。法華堂不空羈索観音、同日光月光などと同じ時期の、同じ仏師たちに依る造像と考へる。

確かに存在している。観念的、抽象的、擬人的な邪鬼ではなく、現実にそれ以外の姿は考えられぬ存在として、四天王の足許で呻き、叫び、苦しみでいる。

持国天邪鬼は、腰の上の天王の片足に重量のすべてをかけられ、四つん這いの体を海老のように反らせたところを、片方の脚で顔を踏みつけられ、その痛みに大声をあげて叫ぶ姿である。地面に爪を立てた三本指の手が、実際にこの邪鬼の苦痛を表現する。

広目天邪鬼は横さまに倒れた腰を片足で踏みつけられ、両手で地面を支えようとする肩先を他の足で押さえつけられて、ぐつと重量がかけられている。その主みに歯を食いしばつて呻く顔貌は、徹底した醜怪さである。これほど醜怪な顔は、邪鬼多しといえども他にあるまい。正確無比な醜さとでも言うか。

多聞天邪鬼は兇惡の相である。これが四つん這いに踏みつけられるが、渾身の力をこめて両腕を立てる。その眼に燃える恐ろしい恨の火は、邪鬼がやがて反抗の鬼となろうとする前兆のようだ。人間の邪鬼極

くとも三分の一の時間は、この逆技の練習にあて、痛い痛いと叫びながら鍛錬している。嬉しいことには鍛練をすればするほど、その痛さがなくなり、ついにはいさかも痛みを感じなくなる。そこで最後に、合氣道札賛を繰りかえしたいが、真底は大東流合氣武道万歳と叫びたい。

(14)

くとも三分の一の時間は、この逆技の練習にあて、痛い痛いと叫びながら鍛錬している。嬉しいことには鍛練をすればするほど、その痛さがなくなり、ついにはいさかも痛みを感じなくなる。そこで最後に、合氣道札賛を繰りかえしたいが、真底は大東流合氣武道万歳と叫びたい。

(15)